

第 85 回 JCBH フォーラム開催報告

テーマ：この目で見た中国 ～中国社会のより深い理解のために～

講師：杉本勝則氏 北京外国語大学 北京日本学研究中心 客座教授
桜美林大学 北東アジア総研 客員特別研究員



1. 日時：平成 29 年 1 月 19 日（木） 16：00～17：45
2. 場所：フォーラムミカサエコ 7 階ホール
3. 参加人数：21 社 39 名

杉本様には、会報誌「日中建協 NEWS」の 220 号（2016 年 3・4 月号）から 225 号（2017 年 1・2 月号）まで、連載記事「この目で見た中国」を 1 年間にわたり全 6 回執筆をいただきました。

今回はその集大成として、広報委員会と交流委員会の共同企画として講演をいただきました。

只今ご紹介に預かりました杉本です。私は国会に勤めておりまして、中国関係の事はプライベートでやっておりましたが、実際のところはどうかのだろうということで定年を機に中国に留学してきました。

一、日本の常識、思い込みで考えないこと

1. 太子党、共青团一枚岩論への疑問（世間常識で考える、ベタ記事に真実あり）

胡錦濤政権の末期、日本のマスコミは、太子党（共産党幹部の子弟）と共青团（共産主義青年団、官僚、共産主義青年団、エリート集団）の対立、太子党の一枚岩論を報道していました。しかし、常識的に考えて、共産党内で親同士が熾烈な権力闘争、命のやりとりをしているのに、子供同士の仲が良いことがあり得るだろうか？ 仲が良いという根拠は、共産党は昔から一族みたいなものなので子供の時から一緒に遊んでいたと書かれているのですが、実際にそんなことが有り得るのか？

一、日本の常識、思い込みで考えないこと

1. 太子党、共青团一枚岩論への疑問（世間常識で考える、ベタ記事に真実あり）

- ・胡錦濤末期の権力闘争を日本のマスコミは、**太子党 v.s. 共青团**の闘いと単純化。太子党一枚岩論が言われていた。
- ・しかし、常識的に考えて、**親同士が熾烈な権力闘争**をしているのに、その子供達の仲が良いことが有りえるのか？ **共青团は基本的に官僚集団に過ぎない**
- ・**薄熙来**の父親は**薄一波**。習近平の父親は**習仲勳**。前者は**胡耀邦**の失脚を図り、後者はこれを**擁護**。広東の繁栄の基礎を築くが、**鄧小平**には遠ざけられる。
- ・薄熙来の子**薄瓜瓜**と習近平の娘**習明沢**の対照的な留學生生活

 <small>（出所：朝日新聞）</small>	 <small>（出所：百度百科）</small>	 <small>（出所：recordchina）</small>
---	---	--

- ・日本人に愛想がよく評判の良かった**薄熙来**と彼を副総理に昇格させないために行った兵備副総理の「**裸退**」宣言（2008年）
- ・政治家を評価するには、その人物の**本性**、**知性**の**見極め**が特に重要。
⇒実感としては、『マスコミ受けの良い奴に、××な奴はいない！？』

具体的に言うと、薄熙来の父薄一波は副総理でした。習近平の父習仲勳も副総理。今でも中国人に大変人気のある胡耀邦が失脚した時、習仲勳は胡耀邦を庇ったが、薄一波は追い落としの先導をしていた。

考え方や行動が全く違うのです。もう一つ言うと、薄熙来の子供の薄瓜瓜は有名なドラ息子で、留学してスポーツカーを乗り回している。一方、習近平の娘の習明沢は、悪い話はなにも聞こえてこない。慎重しやかに留学生活を送っている人とドラ息子の親同士が仲が良いということはあまり考えられません。

薄熙来は、日本人からの評判が非常に良かった。私の友人達も親交があり、素晴らしい人だと聞かされていた。薄熙来は、大連で素晴らしい功績をあげている。将来偉くなると聞いていたので注目していたが、ある時、新聞のベタ記事に、副総理をしていた呉儀が薄熙来を副総理に昇格させないために、「裸退」(次の官位を求めずに引退すること)の宣言を行い「私は次の官職は何もいない。その代わりに薄熙来を私の後釜にしてはならない」と言い残して去ったとあった。私は、それを見た時に驚きました。普通、余程の事が無いとそのようなことは言わない。「あれ、薄熙来ってどういう人なの？」日本のマスコミの話と違うなと感じました。今でも、薄熙来を権力闘争の犠牲者だと言う人もいますが、薄熙来は党内でかなり浮き上がっていた。しかし、日本のマスコミはそのようには報道はしなかった。実際と違う報道をしていたのです。(会報誌「日中建協 NEWS」第 220 号)

杉本氏は、参議院事務局で国会の委員会運営や調査を担当されていたことから、実際の委員会の内容とマスコミが報道することのギャップを目の当たりにし、マスコミは真実を伝えていないという思いを長く抱いてこられました。そのような経験から、中国について言われていることや報道されていることが、果たして事実なのかという疑問を持って北京に留学され、そして、そこで実際にご自身が目撃したことを発信いただきました。

この後のお話は、「抗日戦争勝利 70 周年記念パレードで見たもの」「一带一路の現実」「ルイスの転換点議論への疑問」と続いていきます。そして、上掲の第一章「日本の常識、思い込みで考えないこと」について、単純に言ってしまえば「中国は何事も日本の 10 倍で考える」とまとめられました。

第二章は「日中両国の体制の違いと国民の受け止め方」について、「政治家の行動を見る目は、日中では正反対」「日本と異なる中国の体制を理解すること」「憲法と共産党の関係」などについて、具体的な例を示しながらマスコミ報道だけでは見えない実態を紹介いただきました。

そして、共産党の一党支配を歴史的に見ていき、その上で中国事業は難しいかという問題への解。

最後は、中国ビジネスに携わる人には中国の歴史について認識を持ってほしい、日本は遙かに及ばない中国の歴史は凄いとしか言いようがなく、それに対する尊敬心は持たなければならないと。それに対して、日本人は日本人としての自信と誇りを持って接すれば、お互いが尊敬することによって関係がうまくいくとのアドバイスで、日本企業の成功を期待いただいています。



今回は、1年間の連載では書ききれなかったところにも言及され、出来るだけ多くのことを伝えたいというお気持ちから、質問時間は懇親会に譲ることとして、時間一杯、1時間45分の講演となりました。

講演の内容並びにレジュメとして配布された PPT の資料は、会報誌「日中建協 NEWS」No.226 号(2017年3・4月号)に詳しく記載しています。